

本日の学び テーマ:「目標を目指して」 テキスト:フィリピ3章10節-4章1節

【理解の手がかりとして】

「目標を目指してひたすら走ること」(3:14b) ——パウロは、ここでキリスト者の人生を陸上競技に譬えて教える。パウロはここで、誰彼と競争して一位になるために頑張るって走りなさいと言っているのではない。キリストによって歩いていく者それぞれの歩みの過程が大切であることを言っている。16節に「いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです」(3:16) とある通り。

パウロは言う。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために」(3:14a) と。私たちに大切なこと、それはそれぞれに与えられている賜物で、それぞれのペースで、着実に走り続け、ゴールに到達することである。そしてその時私たちは用意されている賞を受け取るのである。

その賞とは何か?・・・それは決して、この世における輝かしい名声、名誉、富、高い地位、権力といったものではない。それは、終りのときに与えられる「死からのよみがえり(永遠の命)」にあずかること。私たちは皆がその途上を生きている(走っている)。

パウロはこうも言う。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません」(3:12) と。ここでパウロがこう言っているのには理由がある。彼が手紙を書いているフィリピの教会内には、教会の人々を間違った考えで惑わし、分裂をもたらしていた人々がいたからである。彼らは、自分たちの力によって「すでに得た」とか「すでに完全なものになった」と自称し、誇っていたよう。つまり自らの行為を誇り、自らを義なる者であると主張していたのである。

それはパウロの以前の姿のようでもあった。しかし彼は変えられた。謙遜にされ、以前の誇りを「損失」(3:7) とさえ見なすようになっていた。このように、キリスト者となるとき、自分本意の尺度は崩されていく。パウロは言う。「自分がキリスト・イエスに捕えられている」(3:12) と。

そう、キリスト者の生活は、キリストに捕えられている生活である。決して「私がキリストを捕えた」ということではなく、キリストに捕らえられる生活である。前課でも申したように「私がキリストを知った」ということではなく、「私がキリストに知られていることを知った」ということである。

キリストが私たちを捕えてくださった。ゆえに私たちは、自分が未完成であることに対して不安や動揺を抱く必要はない。ただ必要なことは、その目標を目指して全身を投げ出して走っていくということ。人生を貫いて、キリストを信じ抜き(委ねきり)、そして従い続けていくということである。

またパウロはこう言う。「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」(3:13) と。105歳で召されたキリスト者医師の田野原重明さんは生前「わたしにはまだまだすることがたくさんある。神さまは力を与えて下さることを私は信じている」と言っていたという。彼が遺した言葉の中に、短くも大変含蓄のある一言がある。それは「Keep On Going(進み続けよう)」という言葉。私たちは、<永遠の命>という賞を目指しての人生の途上にある。世にある何ものも、それに勝る「賞」はない。

パウロはまた「わたしに倣いなさい」(3:17) と言う。「わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい」(3:17b) とも言っている。しかしパウロはここで、単なる自信家としてそう言っているのだろうか。「自信」というのは「自分を信じる」と書く。はたしてパウロは自分を信じていたのか?・・・いいえ、彼はキリストを信じていた。キリストに救われて新しい命を生きていた。

ゆえに、パウロの「わたしに倣いなさい」とは「わたしの内にあって、わたしを生かしておられるキリストを見なさい」ということである。「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい」（一コリ11:1）と言うように、目当ては「わたし」ではなく、その「わたし」を生かしている「キリスト」なのである。

パウロはフィリピの信徒たちが、互いに連帯してそれぞれの信仰者の人生を走り抜くことを切に願っている。その切実さが感じられる言葉が「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが」（3:18）という部分。「涙ながらに」・・・「涙」と言えば、イエス様がその生涯で涙を流されたことがある。最後にエルサレムにお出でになった時に、その町のために泣かれたということがあった（ルカ19:41）。

なぜイエス様は泣かれたのか。それはエルサレムの町が、そこに生きる人たちが、余りにも神の御心に対して無理解だったから。その涙の直後に、イエス様はエルサレム神殿の境内で、私利私欲の商売に明け暮れていた人々を追い出す、という有名な出来事がある。珍しく、荒々しくその感情を露わになさるイエス様である。そのイエス様の激しさは、人々の生き方に対する怒りから来ている。そしてその涙は、本当に口惜しい思いであられたらう。そしてその思いは、使徒パウロに受け継がれ、いや、彼の内側に生きて働かれるキリストの感情として「涙」となって溢れているのである。

パウロは泣いた。それは「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者」（3:18）が余りにも多かったから。「十字架に敵対する」、それは「キリストの十字架によって贖われなければ決して救われぬ私、つまり罪人としての私」を受け容れない、ということ。それは、自分で自分を救い得る、と考えてしまうこと。それはキリスト者の道ではない。

パウロは「彼らの行き着くところは滅びです」（3:19）とも言う。「滅び」の反対は「救い」であるが、その「救い」の内実が20節。それは「しかし、わたしたちの本国は天にあります」という言葉である。イエス様は言われた。「神を信じなさい。そしてわたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。」（ヨハネ14:1-3）。そしてその後には有名な言葉が続く。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（14:6）。そう、イエス・キリストを信じて従う道は、天の神様に通じている。

「このように主によってしっかりと立ちなさい」（4:1）——私たちは「主によって」、キリストによってしっかりと立つことが出来る。教会も、キリスト者一人ひとりも、「主によって」立ち、そして歩む。天の御国を目指しながら